

1963年以来、海外調査を行うことが出来たのも社長の了解の許に重役の三宅馨博士が決定されたからである。斯様に有能な多くの重役を傘下に集めることが出来たのも武田氏の人を見る明と徳があったからであろう。昭和46年に創業 190 周年を記念して薬用植物画譜という豪華な書物が出版された。氏が尊敬した刈米達夫博士と氏の友人小磯良平画伯が協力してつくり上げたもので、仲々美術画の画材になし難いブクリョウやマクリなども美しい姿で画かれている。昨今日本では薬業界に対する風当たりが強く、また春には将来を嘱望して居られた御長男を失い、それらの心労が死期を早めたのかも知れない。武田薬品創立 200 年を目の前にしての不幸であった。ここに謹しんで御冥福を祈る次第である。

○高等植物分布資料 Material for the distribution of vascular plants in Japan.

102 ヒメチゴザサ *Cyrtococcum patens* A. Camus 小笠原諸島の植物について調査研究されて居られる林業試験場の豊田武司氏から、同氏が昭和54年1月2日、父島の初寝山から中央山の間で採集された、イネ科植物の同定を依頼された。

初寝山附近は一般に昔から住居のなかった地域であり、小川および湿地を含む低い地域と共に本来の植生が殆んど破壊を免がれて残っている植物の宝庫だと言われている。ミクロネシア・琉球・台湾・中国大陸およびフィリピンの標本と比較して旧熱帯に広く分布する *Cyrtococcum patens* ヒメチゴザサであることが分った。余り乾燥がひどくない森林の下草として群生しているが、穂がおもに秋冬にかけて出るためか今迄報告されていない。小笠原の植物は硫黄列島・ミクロネシア・琉球・台湾・フィリピンのフロラと関係が深く、ヒメチゴザサもこれらの地域に共通して分布する種類の一つである。

ヒメチゴザサは小穂が紫褐色でやや小さく、葉鞘の長さはほとんどが 2 cm 内外で、花序の分枝は長いやや上向きに小数の小穂がつき、葉は小さいので、ヒロハヒメチゴザサ *C. accrescens* Stapf や、ミクロネシア・中国南部・フィリピン・マレーシア・タイ・ビルマ・インド等に分布して小穂柄の短い *C. oxyphyllum* Stapf と区別できる。水牛が食べているのを台湾で見かけたことがある。この標本の発見で小笠原の植物相に新しい記録として属のレベルでヒメチゴザサ属 *Cyrtococcum* が加えられることになる。

(玉川大学、許 建昌)

□生物学御研究所：伊豆須崎の植物 (Flora Suzakiensis) 266 pp. 64 pls. 1980. 保戸社、大坂。¥6,000. 陛下の伊豆須崎御用邸を中心としたフロラである。那須に次ぐフロラで、大体それと同じ体裁になっている。この須崎は南伊豆で高知の足摺岬に似た点が多いし、またウィリアムズとモロウとが日本ではじめて採集した下田に近く、昭和50年御訪米の際にタイプの標本類を親しく調査されたことと記しておられる。

地質や気象、沿革、植生、分布上の特徴、研究史上注目すべき種類（イズアサツキ、イズドコロ、シモダガシオオイ、ソナレセンブリ）については和英両文で記されている。